

## 死と生の間で考える

現代宗教研究所長 三原正資

本日は、この教化学研究発表大会にご参加いただき、発表者には心から御礼申し上げます。最初に、例年とは異なった発表大会を企画するに至った経緯を説明します。

昨年（平成二八年）一〇月六、七日、仙台市で宮城県宗務所担当のもと、第三四回東北教区教化研究会議が開催されました。テーマは「被災者の心に寄り添う」。

報告書にまとめられた私の〈講評〉から引用します。

三つの分科会に参加して、大震災に遭遇した被災僧侶の方が、赤裸々に、しかも具体的にご自身の被災状況を語られたことに大変驚きました。

これは、ある方は、津波の襲来を前に取り残された老夫婦の姿が記憶に残って離れない、と悲痛に語られ、また別の方は被災地においては僧侶としての私は全く無力であったと率直に述べられたことが、私の心に残ったのです。

（略）被災僧侶としてでなければ決して語ることができない言葉が、深刻な生命の危機に瀕した状況の中で語られた。（略）未曾有の大災害を経験された方は、これを伝えることはできないと語られたが、是非何らかの形で残

していただきたい。

とお願いしました。

これに先だち、全体会議の中でも、被災僧侶の体験を何らかの形で残したいという声があり、終了後、さまざまなことを検討した結果、東日本大震災七回忌に当たる平成二九年に開催される教化学研究発表大会を充てることにした次第です。

このような事情によって、本日は東北六県の方々、それに加えて平成七年の阪神・淡路大震災で被災された方、また記憶も新しい平成二八年熊本地震で被災された方にもご発表をお願いした次第です。

今年（平成二九年）六月下旬、私は熊本地震被災地の本宗寺院三カ寺を訪問しました。被災者は気丈に明るく応対されますから、一瞬、状況は改善されたかのような印象を与えられますが、実は問題は何も解決していないという深刻な事態が見えて参ります。

益城町のテント屋台村へ行ったときのことで。被災地の人々の明るい声を聞きながら、平成二四年に大槌町仮設商店街へ行ったときのことを思い出しました。この明るい声の向こうには救出されたものの声を発する力を失った多くの人々、そして、いのちを失った方々の声なき声が存在することを、私は感じないわけにはいきませんでした。

今年二月、奥野修司氏の『魂でもいいからそばにいて―3・11後の霊体験を聞く―』（新潮社）が出版され、現在も多くの人々に読まれています。

この本には、大切な人をなくした人々の心の叫びが記録され、そのことばに私の心はふるえました。

「妻と娘が発見されたのは、あの日から二週間経った頃です。二週間もあの冷たい中に晒さらされていたのかと思う

と、しばらく風呂には入れませんでした。自分だけが温かい風呂につかるなんて、妻や娘に、ほんとに申し訳ないと思ったのです。」

「納得しないと成仏しないと云われますが、成仏してどっかにいっちゃうんだったら、成仏しないほうがいい。そばにいて、いつも出て来てほしいんです。」

「みなさんの言う希望は、この世の希望ですね。私の希望は、自分が死んだときに最愛の妻と娘に逢えることなんです。死んだ先でも私を待っていてくれるという妻の言葉こそ、私には本当の希望なんです。」

この本には、このような被災者の魂の叫びが記録されています。

他にも注目された本があります。『呼び覚まされる霊性の震災学 三・一一生と死のはざままで』（東北学院大学震災記録プロジェクト・金菱清〔ゼミナル〕編 新曜社 二〇一六年）です。

この中で、「週刊新潮」や「AERA」の書評が注目したのが、金菱ゼミの学生・工藤優花<sup>ゆか</sup>さんの執筆した第一章「死者たちが通う街」です。

工藤さんは次のように述べています。

東北大震災以降、東北の被災地を中心に、怪奇現象の体験談や噂話が相次いでいる。(略)しかし調査をしていると、幽霊現象と呼ばれるなかで、とりわけ異質な現象があることがわかってきた。(略)それらは明らかに「リアリティ」を伴う幽霊現象なのである。

一例を紹介します。

一三年の八月くらいの深夜、タクシー回送中に手を挙げている人を発見し、タクシーを歩道につけると、小さな小学生くらいの女の子が季節外れのコート、帽子、マフラー、ブーツなどを着て立っていた。時間も深夜だったので、とても不審に思い、「お嬢さん、お母さんとお父さんは？」と尋ねると、「ひとりぼっちなの」と女の子は返答をしてきたとのこと。迷子なのだと思い、家まで送ってあげようと家の場所を尋ねると、答えてきたのでその付近まで乗せていくと、「おじちゃんありがとう」と言ってタクシーを降りたと思ったら、その瞬間に姿を消した。確かに会話をし、女の子が降りる時も手を取ってあげて触れたのに、突如消えるように姿を消した。

タクシードライバーの体験を集録し検討した工藤さんは次のように述べています。

私たちはまさにいま、靈魂観を改めるところに立たされているのではないだろうか。東日本大震災を通して、靈魂に対する知見をどのように広め、受容し、次に活かすか、それをするかしないかでは、人生におけるモノの認識が変わってくるであろう。

驚くべき発言です。現在、二〇代初めの工藤さんの先行世代は「人は死んだらゴミになる」と考え、その結果が「0葬」や「無葬」ではなかったのでしょうか。

『靈性の震災学』の編者は述べています。

未曾有の災害において艱難辛苦を嘗め尽くした経験の末に、彼ら彼女らが到達したのが「靈性」であった。(略)人間の秘められた高次の感情である「靈性」を、知識や概念としてではなく感覚的に「わかる」境地に、震災の当事者たちは到達している。

〈TOKYO 2020〉に向かっている私たちが、死と生の間において、自覚すべきはこの靈性ではないでしょうか。日常生活、平凡な人生の奥深さに気づきたいものです。

さて、このたびの発表大会には現在、立憲民主党参議院議員・党幹事長である福山哲朗氏が講演されます。その経緯についてお話しします。

私は、昨年秋、全日本仏教会・社会人権部の依頼で、参議院議員会館で開かれた民進党仏教議員連盟で法話をする機会をいただきました。そのとき拙著『宮沢賢治の宇宙』(日蓮宗新聞社二〇一二年)を配布しましたが、その後しばらく経って、当時会場にいた福山氏から、拙著に対する感想とともに、氏の著書『原発危機 官邸からの証言』(ちくま新書 二〇一二年)を贈られました。

福山氏は東日本大震災福島第一原発事故「官邸対策室」の責任者、当時内閣官房副長官でした。そこで今年の一月、氏には当時の官邸からみた大災害への対応を語っていただき、政治家の立場からこれからの日本人の生き方への提案も併せていただきたいとお願いしました。若いころ大変「苦労され」、「誰一人として排除されることのない社会」(『私の「貧乏物語」』岩波書店 二〇一六)を目指して活動されている福山氏からは、人口減少の中、希望なき格差社会に向かうかのような日本の処方箋を示していただけると考えています。

原発は人類の科学的知性の究極の産物の一つです。しかし、それが今や、人類に致命的な危機を招来しようとしています。「秘められた高次の感情である」私たちの靈性はその危機を克服できるのか、このことにも、参加者の方か

ら言及されることを期待しつつ、所管の挨拶とさせていただきます。